飛鳥寺遺跡模型・川原寺伽藍復原模型

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

当研究所は，飛鳥地方において，昭和30年から32年にかけて飛鳥寺跡，昭和32年から33年度にかけて川原寺跡の発掘調査を実施した。本年度はこの調査の成果をもとに両寺の模型を製作することが文化庁で決定され，飛鳥寺については1/50の遺跡模型，川原寺については1/100の伽藍復原模型を作った。この事業は文化庁記念物課所管の予算によるものであるが，設計および実施についての指導をすべて研究所がおこなったので，以下に概略を述べる。

飛鳥寺遺跡模型　発掘調査実施当時の遺構及びその周辺の状況を表示し，遺構と伽藍配置が理解できることを目標とした。製作範囲は石敷広場から講堂に至る南北205m，東面回廊から西門に至る東西145mである（模型実寸4.1m×2.9m）。材料は木材を台とし，表面・細部を樹脂成形し，十分質感を表現できるよう彩色した。

発掘は伽藍主要部分についてはほぼ全域にわたっているものの，面積的には製作範囲の1割強に過ぎず残り9割弱は未発掘地の水田・畑・宅地などのため，如何にすれば遺構模型としての効果をあげ得るかの表現方法に苦心を要した。遺構部分については実測図・写真などの資料にもとづき正確に表示したが，周辺の地形部分については建物や樹木を立体的に作った場合，かえって全体として遺構部分が引き立たなくなると考えられたので，省略や抽象などの手法を用いた。

川原寺伽藍復原模型　この模型は川原寺伽藍主要部と南大門南の橘寺北門・築地までを製作範囲とした（模型実寸2.3m×1.3m）。伽藍主要部については建物の復原をおこない，南大門より南橘寺北門までの間は遺跡模型及び地形模型とした。これまでに我々は平城宮関係で，1/600の宮全域想定復原模型を，また1/10で朱雀門，内裏正殿，朝集殿などの模型を製作してきたが，1/100で寺院伽藍全体の復原模型を作るのはこれが初めてである。この模型は従来の1/10の模型とは異なり，仕口，継手などの細部及び内部構造まで復原することは不可能なので，建物外観については部材など正確を期したが，内部は箱造りとした。材料は本来木材である箇所は木材とし，屋瓦，斗栱等は樹脂を用いた。

ここでは今回設計した建物の形式を決定していった過程について簡単に述べる。中金堂は伽藍中第一級の格をもつ建物であり，川原寺が白鳳期の一級の寺院である点を考慮し，平面形式などから重層とした。屋根は入母屋，寄棟の両案を検討したが，集中性を重視し，また後に述べる中門を入母屋とした関連から，寄棟とした。平面形式については身舎の周囲礎石だけに地覆座が付くことから，四周一間通りを吹き放ちとした。この際薬師寺金堂に見られるように裳階が付く可能性も考えられるが，今回はこの案を取らなかった。

塔は三重と五重の二通りの場合を考えたが，中金堂との釣り合いから五重とした。塔と相対する西金堂は，桁行に比べ梁行の小さい横長平面の建物で重層とは考えにくく，また中金

堂，塔との釣り合いから考えても，中庭から見た場合重層としたのではヴォリウムが大きくなり過ぎ，適当でない。一方単層とすると，伽藍全体の南立面が塔，中金堂，西金堂と西に向かって次第に低くなり，建築群としての釣り合いを失することとなる。この両方の点を考慮し，最終案は単層とし，屋根をできるだけ大きくするため入母屋造とした。また中庭からの用途などから考え，唐招提寺金堂にみるように正面一間通りを吹き放ちとした。

中門は，中金堂，塔，西金堂との釣り合い及び南大門との関係において，単層，重層の場合についていくつかの案をつくり比較検討した結果楼門とした。この理由は，中門平面は南大門のそれより小さいが，単層としたのでは回廊及び回廊内の建物との釣り合いを考えた時，余りにも貧弱となりすぎるからである。また法隆寺中門のような重層とすると，梁間が狭いためかなり無理をしても形がとれず，更に回廊との納まりもうまくいかない。川原寺の場合は梁間2間であって，必ずしも重層とは考えられないが，中門の位置に「ロウモン」という小字名が残っていることをも考え合わせ楼門とし，屋根は入母屋造とした。次に南大門は，平面が中門より大きく，礎石も大きいので重層門とも考えられた。しかし南大門を重層，中門を単層とする天平寺院の形式へ移行するにしては，当寺は早期に過ぎると考えられたので単層切妻造の八脚門とした。回廊は梁間が法隆寺西院回廊とほぼ等しいので，これにならった。

つぎに僧房であるが，この平面は内側一間を回廊とし，外側を房とするものである。設計では回廊部分をも取り込んで，中央に棟を通す構造とした。僧房と回廊・軒廊との取り付き部分は複雑で，様々な納まりが考えられるが，ここでは軒高，屋根勾配をすべて等しくして最も単純な納め方をした。講堂は平面規模もはっきりしないが，法隆寺大講堂を参考として設計した。鐘楼，経蔵の遺構は，未調査で確認されていないので法隆寺のものを模し，位置は全体の釣り合いを考慮して配置した。

軸部や組物などの細部については，建物にA・B・Cの格付けをおこない，中国宋代の「営造方式」の木割りの考え方を参考とした。また，川原寺とほぼ同時代の遺構である法隆寺西院の堂塔，薬師寺東塔，海竜王寺五重小塔，伝法堂前身建物および唐代の慈恩寺大雁塔仏殿図などを参考として設計した。（天田　起雄）

第1図「川原寺伽藍復原模型」範囲